

第14部会

第十四部会

現代巡礼における死の位相

—— スペイン・サンティアゴ巡礼の事例 ——

岡 本 亮 輔

サンティアゴ・デ・コンポステラはカトリック第三の聖地とされるが、西欧の教会関係者の一部が宗教的ツーリストという言葉を用いることが示すように、現代の巡礼者は必ずしもカトリック的宗教実践として巡礼を行っているわけではない。二〇〇五〇七年の巡礼証明書の発行対象となる歩き・馬・自転車による巡礼動機についてみると、常に半数以上が「宗教的およびその他の理由」、四割弱が「宗教的理由」、一割弱が「非宗教的理由」を挙げており、過半の巡礼者が非宗教的な動機をもって巡礼を始めていることがうかがえる。実際、巡礼者たちの自己の宗教性・霊性についての語りの中では「スピリチュアルだが宗教的ではない」という表現が頻繁に見られるわけだが、彼らにおいては巡礼体験が構成される文脈もカトリックの文脈とは重ならなくなっているのではないだろうか。

サンティアゴ巡礼の終着地は、その名の通り九世紀に奇蹟的に発見されたとされる使徒ヤコブの遺骸つまり「聖遺物」が安置される大聖堂であり、同巡礼は聖遺物崇敬を軸にした典型的な聖人志向・目的地志向の聖地巡礼だといえる。だが、ポスト

世俗化状況においては、聖遺物を取りまく環境、とりわけ聖遺物の真正性に対するまなざしに変化している。E・M・ブルーナーによる歴史遺産のツーリズム・アトラクションの四類型にしたがえば、聖遺物の真正性とは「教会権威の承認によるオリジナル性の担保」という複層的真正性として理解できる。だが、世俗化がもたらしたのは他ならぬ教会権威の掘り崩しであり、その結果、現代では過半を占めるスピリチュアルだが宗教的ではない巡礼者、さらに他教派・他宗教・無宗教の者にとつては、ヤコブの遺骸という聖遺物はカトリック的フィクションになったといえるのである。

これに対して、現代のサンティアゴ巡礼において体験の真正性と結びつけられる局面として筆者が注目したいのが巡礼者同士の相互作用である。A・P・ボアーズは自らの巡礼記で、サンティアゴ巡礼の雰囲気、とりわけ他の巡礼者たちとの関係性のあり方が「テゼ共同体」や「ラルシュ共同体」と類似することと指摘しているが、これら新しいタイプの巡礼地は制度的宗教性を忌避し自らの意思・嗜好を重視するポスト世俗化の巡礼者を集めている場所である。ボアーズは、カミーノにはカトリック信仰に回収されない「固有のエートス」があり、それを「信頼」や「協働」であるとしている。つまり、会ったばかりで名前も知らない人と食住を共にし、きわめて親密かつ個人的な会話をするようなコミュニケーションの開放性こそがサンティアゴ巡礼の特徴だというのである。

そして、こうした他者とのコミュニケーションやつながりの感覚を現代サンティアゴ巡礼の特徴として捉えるならば、そこ

において重要な表象として「巡礼墓」が指摘できる。サンティアゴ巡礼路には巡礼途上で命を落とした人々の墓がいくつも作られている。ピレネー山中には二〇〇二年に亡くなった日本人巡礼者の墓が、レオン近郊には朽ちた自転車モチーフにしたドイツ人の自転車巡礼者の墓があり、そうした場所には必ずといって良いほど花や石が添えられている。また、間違いやすい分かれ道には正しい道へと導く矢印や目印が造られている。要所に建てられた十字架には、必ずその足元に無数の石が積まれている。こうした行為は、ある巡礼者が直接には接しない過去と未来の巡礼者も含めた他者とのコミュニケーションを目指すものとして理解できるだろう。そして、巡礼墓は自らにも訪れうる死を「可能態」として教唆し、それによって巡礼同士の紐帯を補強する場として位置づけられるように思われる。

聖地旅行をめぐる「支え合い」の歴史

——高齢者・障がい者の事例——

板井正斉

本研究の目的は、「誰でももの祈り」としての高齢者・障がい者の聖地への旅行と、それを支える地域住民のボランティアから、「聖地らしさ（オーセンティシティ）」の現代的な多様性を宗教学の立場から明らかにすることである。

聖地を訪れる巡礼者への対応をテーマにした研究では、四国遍路における「巡る」人々と「巡られる」人々との関係性が

ら、日常の実践としての「接待文化」を明らかにした浅川泰宏の研究がある。さらに、高齢者や障害者と巡礼の関係性については、寺戸淳子によって、現代カトリック巡礼の象徴的な聖地であるルルドでの傷病者巡礼の体系化がなされている。二つの先行研究を本研究の関心にひきつけるならば、浅川は、四国遍路の巡礼者歓待習俗である接待を徹底的に問い直すことで、従来解釈されていた主体的で自覚的な動機による美的な意味づけに対して、「意識されない慣習的行動すなわち実践（*unseen practice*）」としての接待を見出した。寺戸は、オスピタリテによる支援活動を単なる巡礼支援団体とは見ずに、共和国の崩壊に対するカトリック世界の対抗的性格を指摘しつつ、上流階級の男性による公的慈善として始まった活動が現在では、「私人としての男女が公開空間で行なう、見ず知らずの他者に向けて開かれた活動」に変化していることを言及する。

そこで本発表では、これまで発表者が見てきた伊勢神宮参拝における参拝ボランティアを事例として、四国遍路の接待や、ルルドのオスピタリテの深層に類似要素があるのだとすればそれはどのようなものか、またそこに日本人的なボランティアム、いわゆる「支え合い」とのつながりを、歴史的な高齢者・障がい者の伊勢参宮に注目して考察を加えた。

結論からすると高齢者・障がい者の伊勢参宮について、様々な視点からその実態を探ってみたが、ここまで直接的な記録は見出せていない。膨大な史料の一部を見たに過ぎず、今後も丁寧に捉えていく必要はありつつも、仮に見出しにくいとするならば、それはどのような意味を持つのだろうか。例えば、四国